
派遣勇者参上です！敵は・・・スライム？

芳奈揚羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

派遣勇者参上です！敵は……スライム？

【Nコード】

N9818W

【作者名】

芳奈揚羽

【あらすじ】

勇者とは人々が憧れる理想の仕事。派遣勇者とは、そんな勇者を有料で派遣する会社である！さあ、オレンの初仕事は……え、何？スライム？

第1話 勇者の仕事

「それでは、勇者「オレン・マスキード」はこちらへ。」
「はい！」

城の大広間に集まる学生の中から、一人の男子が進み出た。

「あなたは今日で学生の期間を終えます。それはつまり、派遣勇者はけんゆうとしての仕事に就くということです。苦難があり、喜びもあるでしょう。あなたの働き次第で、その国の、その世界の運命が変わってしまうことを十分に把握し、それでも派遣勇者になることを望みますか？」

「はい、もちろんです。勇者になるのは、俺の小さい頃からの夢でしたから！ここまで来て投げ出すなんて出来ません。」

「それでは、給料分しつかりと、命をかけて働くということによるしいんですね？」

「はい。この聖剣>アルクシード<にかけて、誓います。」

「わかりました。それでは、あなたはこれから我が派遣勇者デュランダルクの正式社員です。これからよろしくね。オレン君。」

「はい！よろしくお願いします、社長！」

勇者養成学校。

それは、この世界>エイジ<の人気職>勇者<を養成する学校である。

第1から第3学校まであり、古い中世のお城を改装して建てたこの学校は3番目。

つまり、>第3派遣勇者養成校<である。

なぜこんな学校が存在するのか、それは、古くから伝わる勇者召喚システムが原因である。

簡単に言えば、異世界の勝手な都合で召喚された拳句、理不尽な

扱いを受ける人間が多すぎたのである。

古くからの召喚システムでは、何かよくわからない不可思議な力が勝手に勇者を決定し、おまけに被害者は拒否権すらもなく強制的に連れてこられてしまう。

そして、被害者に異世界で生きる術などあるはずがない。

何故か言葉だけは通じるのだが、通貨もなく頼れる人間もなく、生き残るために泣く泣く召喚者たちの思惑通りに勇者として働いてしまう。

問題を解決出来ることなど稀^{まれ}で、ほとんどの人間は解決する前に死んでしまう上に、もし仮に解決出来たとしても元の世界に帰れないということがほとんどだった。

魔王だの邪神だの、そんな大層な存在を倒し世界に平和をもたらした英雄は、今度は政治の道具にされるのがオチだからだ。

さて、この状況にぶち切れたのが、最も召喚される頻度が高かった世界>エイジ<である。

この世界の人間はとにかく強いのだ。

戦闘方法は千差万別、しかしかなりの人間が並みの魔王等と同レベルの力を有しているために、とにかく召喚されまくるのである。

異世界はそれこそ無限大に存在すると言われており、その中で勇者を召喚する理由とその技術、両方を持っている世界だって無数にある。

そして、拒否の出来ない勝手な召喚のせいでどんどん人口は減っていき、とうとう>エイジ<は滅亡寸前まで追い込まれたのである。この状況に対抗するために>エイジ<は、>異世界連合<^{いせかいれんごう}へと協力を求めた。

>異世界連合<とは、自力で世界跳躍が出来るほどに発展した世界の同盟である。

>エイジ<は、自力で跳躍こそ出来ないものの、異世界に連絡をとれる程度には発展していた。

協力をもとめられた>異世界連合<は、直ぐに各世界の技術を結

集して、古くからの召喚システムに割り込みをかけるシステムを開発した。

例え>異世界連合<が勇者召喚を止めるように他の世界に警告しても、世界は無限に存在するのである。

つまり、全ての世界に警告することは出来ないのです、この割り込みプログラム>ロック<の開発は正に苦肉のさくだった。

>ロック<の能力は、勇者として召喚されるものに、拒否権を与えるというもの。

そして、異世界からの任意帰還だった。

つまり、勝手に召喚され、帰る手段が無いからと泣く泣く勇者をする必要が無くなったのである。

こうして、>エイジ<は理不尽な召喚に悩まされることが無くなり、無事滅亡の危機を脱したのである。

しかし、平和になるとこれを事業に出来ないかと考える人間が始めた。

つまり、希望者のみを異世界に派遣して、問題解決の際に報酬を受け取る>派遣勇者<である。

召喚された世界で、報酬を払わないなどごねるのであれば、>ロック<の力で戻ってくればいいだけの話だからである。

戦闘中であれ、命の危険を感じれば元の世界に戻ってきて、体制を建て直し再戦に行く。

よほどのことが無い限り死にはしない上に、世界を救うのだから報酬はたくさん貰えるので、>派遣勇者<はすぐに>エイジ<の一番人気職になったのだ。

専門の職業訓練校まで作られるほどである。

他の世界の命運を分けるかもしれない職業なので、国家資格が必要である。

それを手に入れる一番の近道が>派遣勇者養成学校<に通うこと。長くなったが、つまり「オレン・マスクード」は、先ほどの学校を卒業し、>派遣勇者デュランダル<に就職した、ということな

のだ。

「じゃあまず、ここに名前を登録してくれる？」

> 派遣勇者デュランダルクの社長室、当然オレンの前に座って契約書を出しているのはこの社長「アンジェ・ローエン」である。

肩の辺りでバツサリ切った黒髪に、黒のスーツ、そして切れ長の黒い瞳、年齢は20代前半だろうか。

誰がどう見ても「やり手の女社長」である。

(綺麗だけど、怒らせたら怖そうな人だなー)

「あら、優しい面もあるのよ？」

「え……」

「凶星でしょ？ 考えてることバレバレ。ま、よく言われるから気にしてないわよ。」

口元を押さえて楽しそうに笑う姿は、年頃の女の子のようで、オレンは自分の中の評価を改めた。

「すみません。社長は綺麗ですが、それ以上に可愛い女性ひつこなんですね。」と何気なしに言った。

すると、アンジェは目をパチクリさせてオレンを見ると、

「……ああ、なるほど、天然か……学校の評価欄に「天然」って書かれてたのはそういうことか。」

「え、天然……？」

「いいえ、別に……君、モテるでしょ？」

「え、何ですか？」

オレンは自分は普通だと思っている。

髪はオレンジのショートで、背丈は180cm、スラっとした体系だが筋肉などは鍛えられていて、おまけに強くて男女問わず優しい。

これで普通なんて一体どういう感性してるんだと思うかもしれないが、少なくともオレンはそう思っているのである。

女友達もたくさんいたが、彼女たちに恋愛感情を持たれたことはない、と思い込んでいる。

実際は何度も告白をされているのだが、その度気付かずにスルーされて、彼女たちも諦めてしまったのである。

もう友達でいいか・・・と。

その境地に彼女たちが至るには涙なしには聞けないほどのストーリーがあるのだが、ここでは割愛しておこう。

ここで大事ななのは、オレンは「自分は普通だ」と思っていることである。

「うわ、マジで自覚ないのか・・・何人泣かせてきたのやら。」

アンジェの独り言を聞き取ったオレンは釈然としない気分になりながらも契約書に名前を書き込んでいく。

そして、全部書き終えたところでアンジェに渡した。

「うん、完璧ね。これであなただはこの社員。多分数日中には召喚されると思うから、それまではゆっくり体を休めておきなさい。準備もすっかりしておいてね。」

「はい。わかりました。」

何度も言うが、異世界は無数にあるので、大体1日に1人の割合で召喚されていく。

新人のオレンですら、何日かすればどこかに召喚されるだろう。

(それまでは、社長の言うとおり準備をしっかりとやっておこう。命の保障は完璧じゃない。1つ間違えれば死ぬ可能性もあるんだから)

> ロックくのおかげで戦闘中も離脱できるため異世界での死亡率は格段に下がったが、完全に0%というわけではない。

(生きて帰るために、出来ることはやっておこう)

訓練校を主席で卒業したとは言え、オレンは自分に慢心してはいない。

(一瞬の気の緩みが命に関わることもある。準備はしすぎるということはない)

オレンはすぐさま準備を始めた。

オレンが就職してから2日後、道を歩いている最中それは唐突にやってきた。

「か、体が・・・!?」

体全体がまばゆい光に包まれている。

周囲の人々が目をそらすほどに強力な光だったが、それは数秒ほどすると消えてしまった。

「召喚決まったね、おめでとう。頑張ってきたよ。」

混乱していたオレンに、近くにいたオジサンが声をかけると、周囲からも応援の声が広がった。

(そうか、これが召喚の合図・・・)

初めて見た光景に戸惑っていたオレンだったが、気を取り直すと「はい。行ってきます!」
と言いつ残し、人々の歓声の中召喚場^{ウツクシ}まで走っていった。

オレンが走ること数分ようやく目的の建物に辿り着いた。

「ここが、召喚場か。」

それは、小さなドーム型をした灰色の建物だった。

オレンが鉄製の扉を開けて中に入ると、そこには既にアンジェがいた。

「すみません、遅れました。」

「かまわないわよ。いつ召喚されるのかなんてわからないんだから。それよりも、準備は出来てるのかしら?」

「はい。完璧です。」

オレンは腰の聖剣と、背負っていた青いスポーツバッグを見せた。
「へえ、異次元バッグか。ちよつと型は古いがいいものを持ってるわね。それなら心配いらないか。」

異次元バッグとは、異世界召喚頻度が高い>エイジ<ならではの商品で、バッグに入れた物を異次元にしまうという代物である。

バッグの重量しか無く、収納可能重量はバッグの大きさに比例す

る。

元々はいつ異世界に召喚されても、ある程度の生活が出来るようにと開発されたもので、>ロツク<開発前はほとんどの人間が常に持ち歩いていた。

今は>派遣勇者<の必需品である。

「ならこれから転送を始めるけど、確認しておくことがあるの。まず、私たちのこれはビジネスだから。決して慈善事業ではないことを忘れないで。どんなに相手が困っていても、報酬が払えないのなら仕事はしないで。報酬無しで勇者やってたら、なんのために>ロツク<を開発したのかわからなくなるわ。いい？あなたは大切な社員なの。無駄なことをして傷付いてほしくないの。」

「・・・はい。」

「まず前金として成功報酬の3割を貰うこと。失敗してもこれは返さないことを確認してね。このお金はあなたが自由に使っていいわ。」

「はい。」

例えば、魔物や魔王を倒してくれという依頼だったとしよう。

その場合、オレンの場合、自前の聖剣で攻撃することになる。

だが、稀にその世界の特殊な武器でないとダメージを与えられない敵が存在したりする。

その場合のために、もちろん、宿屋や食事をするときのために前金を準備金として活用することが認められているのだ。

会社の取り分は、残りの成功報酬の半分で、派遣勇者は残りとして前金を取り分として与えられる。

これはかなりの額になるので、一回成功させれば、数年は遊んで暮らせるのだ。

危険にも関わらずこの職の人気の理由である。

「ま、こんなところね。あとは、『生きて帰って来い』としか言えないわ。」

「はい！」

「よし、じゃ、始めるわよ。この台の上に乗って。」

緊張した顔でオレンが建物の中央に向かっていく。

精緻な細工が施された転送台の上には、魔方陣が描かれている。

「いくわよ。準備はいいわね？」

「大丈夫です。」

あまりに緊張したオレンを見て可笑しくなったのか、クスッと笑うとアンジエは右手を前に突き出し、詠唱を開始した。

「時空門開放、魔力充填開始。座標X1167から座標X2600へ。座標y449から座標y116へ転送準備。魔力充填38%、
・60%・82%・99%、100%！時空転移開始！

！」
オレンの足元の魔方陣が青く輝き、オレンのつま先から徐々に分解していく。

(うわ、これは・・・)

言いよの無い嫌悪感を感じながらも、オレンはアンジエを見つめ、

「それでは、行ってきます。絶対生きて帰りますから！」

と叫んだ。

「いやそれ死亡フラグでしょ何でこんなときに建てようとするのよ！」

アンジエが叫んだ内容がわからずオレンは首を傾げる。

その様子に溜息を吐き、しかしアンジエは笑って言った。

「世界を救ってきなさい>派遣勇者<！幸運を祈るわ！」

その顔に笑顔で返しながら、オレンの意識は消え去った。

「がんばってね・・・」

召喚場には、アンジエの声が響くのみだった・・・。

眩しい光が見えた、そう思った途端、オレンの意識は覚醒した。ゆっくりと周囲を見渡すと、2人の人間が見て取れる。

オレンが立っているのが召喚場だとすれば、召喚場のすぐ近くに立っている小柄な人影が召喚主だろう。

身長は160cmほど、黒いフード付きのマントをしているため性別はわからないが、強大な魔力を感じる。

(大したものだ、こんな小さな体で・・・)

通常召喚には大量の魔力を必要とするため、数人から数十人の魔術師で召喚するのが一般的のだが、この場で魔力を感じる人間がこの人影1人なので、この人間だけでやったのだろう。

次にオレンは奥の方に立っている男を見た。

身長160cmほどの小柄な、おそらく70〜80代の老人で、

緑のマントを羽織り肥満気味な腹を撫でながら何かを思索している。

(あれは、駄目だ)

直感的にオレンは判断した。

(この男には野心か、それに近い何かがある。そして、そのためならば全てを犠牲に出来る人間だ)

色恋沙汰には疎いオレンだが、悪人か善人かを見分ける感覚は誰よりも鋭いと自負している。

その直感が騒いでいるのだ、あれは駄目だと。

そこまで確認してから、オレンは近くのフードの人間に頭を軽く下げた。

「召喚に従い参上しました。私は>派遣勇者デュランダルクの社員、『オレン・マスキード』でございます。報酬さえいただけるのであれば、どんな世界の危機でさえ、解決してみせましょう。」

「報酬だ・・・！貴様、自分の立場をわかっておらんようじゃな。こちらの協力が無ければ元の世界に帰ることなど・・・。」

「おや、>エイジ<の勇者派遣を受けるのは初めてですか？私どもは自力で元の世界に帰ることが可能ですが。」

「何・・・？」

怒鳴っていた老人の顔に戸惑いが走る。

「私どもは職業で勇者をしておりますので、報酬をいただけず、た

だき使おうという魂胆でしたら、これで失礼させていただきますが。勿論、今後一切こちらの世界の召喚には応じることは出来ませんのでご了承ください。」

「ぐうぐう……。」

(やっぱりだ……)

この男は勇者を奴隷のように使うつもりで召喚したのだろう。

これは、今回はハズレだったかと思いきや落胆するオレンの瞳に、細かく震えるフードの人物が見えた。

「や……。」

「?どうかしましたか?」

「やったー!」

フードを取り、こちらの両手を掴んで上下に振り回すその人物に、オレンは驚いた。

(少女……!? こんな娘が召喚をたった1人でやってのけたのか!?)

その少女は、美しかった。

年齢は15、6歳だろうか、燃えるような色の赤い髪を肩口で切りそろえており、何よりその表情が素晴らしい。

ずっと見ていたくなる、皆を幸せに出来るような笑顔だった。

そう、例えるなら太陽だろうか。

「私、勇者さんを私たちの都合で働かせるのは嫌だったの!でも、お父様とお母様がやれって言うから、しかたなくやっただけど、お仕事ならお金を払えば何でもやってくれるのね!?」

(なるほど、勇者を奴隷のように無償で働かせるのが嫌だったのか)だからフードで顔を隠していたのだろう。

後ろめたくて。

「大臣、今すぐお父様とお母様にこのことをご報告しなさい。報酬を払わなければこの人は帰ってしまうって!」

「しかし、お嬢様、召喚をもっとすればこやつのような者ではなく、もっと扱いやすい……。」

「ねえ、召喚魔法を使うのは誰だと思ってるのかしら？ 私にあんなに疲れることを何度もすると？ それに、『扱いやすい』何て二度と言わないで。人間を物の様に扱うなんて、私たちに許されてはいません。」

「……！……はい。かしこまりました。」

大臣と呼ばれた人物はそそくさと部屋から出て行った。

そのときにオレンを睨みつけるのも忘れずに。

オレンがそのやり取りにポカンとしていると、その女の子がこちらに笑いかけた。

「それじゃ、まずは自己紹介ね！ 私はこの『リン』の王女、『アンナ・フォン・D・クロイチエ』よ。長いから『アンナ』でいいわ。」

王女という言葉にも、オレンはさして驚かない。

勇者召喚など、国を挙げての行動に決まっているからだ。

「私たちが頼みたいのは、この世界を脅かす悪魔の討伐よ。」

(悪魔ときたか……どれほど強い敵なのだろう)

しかし、オレンの自信は少しも揺るがない。

仕事を請けると決めた以上、どんな敵でも倒してみせる。

「敵は、何なのでしょう？」

「スライムよ……。」

(……))

たっぷり数十秒も沈黙した後、オレンは言った。

「……はあ？」

第2話 『スライムのような何か』

オレンはその言葉を理解するのに、数十秒を使った。

「・・・スライムを倒すためだけに勇者を召喚したと？」

「ええ、そうよ。あなたが驚くのも無理は無いと思う。私だって、勇者として召喚されて依頼されたのがスライム討伐なら驚くもの。いいえ、呆れるかしら・・・。でもね、これは事実なの。この国、いえ、この世界はスライムに滅ぼされそうになっているのよ。」

アンナの顔は真剣そのもので、とてもふざけているようには見えない。

だが、アンナが本気なのがわかってても、オレンが心から信じるこ
とが出来ないのも仕方がないことと言えるだろう。

なぜか、各世界間には、いくつか共通したルールがある。

その内の一つが魔物の強さのランクだ。

ドラゴンなどの幻獣種げんじゅうしゆが最強で、最弱はスライム。

今までオレンはこの定説が覆されたという話を聞いたことがない。
様々な世界に勇者を派遣している>エイジ<に住んでいるにも関
わらずだ。

どれだけ数がいようと、スライム如きでは世界を脅かす程の脅威
にはならないはずだった。

「私の世界では、『スライム』は弱い魔物なのですが、この世界で
は違うのですか？」

オレンが質問すると、アンナは苦い顔をして言った。

「元々は弱い魔物だったわ。でもね、1年前『魔王』を名乗る男が
大陸の東に突然現れて『魔王城』を創り、あちこちの国に侵攻を始
めたの。手勢はたった数匹のスライム。普通のよりも倍くらい大き
いスライムだったけど、所詮スライムだと思って油断していたら、
あっという間にいくつかの国が滅ぼされたわ。」

「な、たった何匹かのスライムで国を滅ぼした・・・？」

オレンは驚愕を隠せなかった。

「幸い魔王は全然強くなって、我が国の隠密部隊が隙を見て捕獲したんだけど、尋問によってあのスライムに対する情報を聞き出したら大変なことがわかったの。」

「それは・・・？」

「その魔王はこの世界の＜魔道学者まどうがくしゃ＞で、そのスライムは研究の結果生み出した最強の品種改良スライムらしいの。一度の突進で石壁をも破壊し、切れば切るだけ増殖し、魔法で燃やしても数秒で再生する、反則レベルのスライムよ。数匹いればドラゴンにすら勝てる。」

「・・・！？」

ドラゴンとは、いくなれば勇者の永遠のライバルである。

種類や生きた年月によって大きく力が変わるものの、強い固体なら1〜2匹で国を滅ぼすことさえ可能なのだ。

種族的に強い人間が多い＞エイジ＜でさえ、ドラゴンを倒すことの出来る力を持つ者は限られている。

ドラゴン討伐は、勇者の最終目標とされているほどなのだ。

(そのドラゴンをたった数匹で倒すだなんて・・・)

はつきり言つて異常である。

「増殖を繰り返して既にどのくらいいるのかもわからないの。今までは東側の国が狙われていたんだけど、多分次はこの国。滅ぼされるのも時間の問題つてわけ。」

それはつまり、東側にあった国は全て滅んでいくということだ。

いくつの国があったのかわからないが、切れば増殖し魔法は効果が無いのでは対応のしようがなかっただろう。

おそらく、何も出来ずに滅んだのではないだろうか。

(でも、今重要なのはそこじゃない)

オレンは確認しなければならないのだ。

「私は、何をすればいいのですか？」

何のために召喚されたのかわからない。

魔王は既に捕らえたらしいし、おそらく生きてはいないだろう。つまり、そのスライムは、主人の命令がなくても動き続けるということだ。

「一度そのスライムと戦ってみないとわかりませんが、とりあえず話しを聞く限りでは私に何か出来るとは思えないのですが。まさか、スライムを全滅させる、というのが依頼内容でしょうか？」

それはおそらく不可能だ。

オレンの戦闘スタイルはオーソドックスな魔法剣士で、いくつかイレギュラーな能力は持っているが、それでもスライムを倒すことは難しいだろう。

何か弱点があるというのなら話は別だが。

(スライムを倒せない勇者って・・・)

オレンは一瞬落ち込みかけたが、直ぐに気を取り直した。

ドラゴンより強いスライムなどそれはもうスライムではない。

『スライムの形をした何か』である。

「いいえ、あなたに依頼したいのは、品種改良スライム第1号、通称『スライムコア』の討伐よ。」

「『スライムコア』・・・？」

「ええ。魔王の尋問中に得た情報よ。全てのスライムを統率するスライムがいるらしいの。これを倒せば全てのスライムの生命活動が停止するわ。元々は、予期せぬトラブルが発生したとき魔王自身がスライムを止めるために付けた機能らしいの。」

(なるほど)

オレンは納得して頷いた。

魔王自体は隠密部隊が捕まえられる程に弱かったらしい。

つまり、その弱い魔王でさえ倒すことが出来る『スライムコア』とは、更に弱い魔物なのだろう。

(勿論、何か特殊な方法でないと倒せない可能性もあるが・・・)

「あなたの考えることはわかるわ。結論からいうと、不明よ。魔王が喋ったのはここまでで、これ以上は何をされても言わなかった。

彼はこの後に牢屋で自殺したわ。」

アンナは一度言葉を切ると、深く頭を下げた。

「この『リン』の王女として勇者オレンに依頼します。どうかこの世界をお救いください。」

態度は毅然としているように見えるが、よく見ると小さく震えている。

断られたらどうしようと思っっているに違いない。

不安で泣きそうになる女の子の姿がそこにあった。

（王女とはいえ、小さな女の子がここまでしたんだ。ここで逃げたら男じゃない。何より、これに応えなきゃ勇者になつた意味が無い。俺は、人の涙を止めるために勇者になつたんだから！）

「王女様、どうか頭を上げて下さい。」

オレンがニッコリ微笑むと、アンナはおずおずと頭を上げた。

「『>派遣勇者<オレンマスキード』、命に代えても必ずや期待に応えましょう。」

オレンは王女の白くて小さい手を取ると、優しく口付けた。

それは、契約完了を示す合図だった。

第3話 勇者の實力 その一端

「勇者に関する諸々は、私に一任されてるの。世界を救ってくれるのなら、出来る限り希望に答えてみせるわ。たとえば、大臣が何と云おうとね。」

アンナのこの言葉によって、オレンが心配していた報酬の話は数分で解決した。

「よかった。」

実は、オレン自身は報酬なんて必要ないと思っている。

オレンは金が目的で勇者をしているわけではないからだ。

(泣いている人たちを助きたい)

ただこの願いのみで行動しているのである。

しかし、オレンが救いたいのはこの世界だけではない。

これからもたくさんの世界に行って、困っている人々を助けたいと願っている。

だが、>エイジ<の人間にかけられている>ロック<のプロテクトを外すためには、>派遣勇者<として登録していなければならぬ。

そしてそのためには、仕事を終える度に会社に登録料として報酬の何割かを渡さなければならぬので、報酬を貰わないわけにはいかないのである。

オレンにとつて>ロック<とは、自分を理不尽な召喚から守るものではなく、自分の手足に付いた枷かせのようなものだった。

「すみません、本当は困っている世界から報酬なんて貰いたくないんですけど……。」

「何言ってるの。私はうれしいよ。最初にお父様が勇者召喚を決定した時、大臣は無償で働かせるつもりだったの。元の世界への切符を条件にね。それじゃあ、まるで奴隷じゃない。この国では何百年も前に無くなつた悪しき風習よ。……だから、あなたが自力で元

の世界に帰れるって聞いたとき、私すごく嬉しかったんだから。」
そう言いながらもアンナの顔は曇っている。

「ただ、この世界の問題を他の世界の人に押し付けるっていう考え
があまり好きではないんだけど・・・。」

「いえ、困ったときはお互い様です。」

オレンはどう答えればいいのかわからず、曖昧な答えを口にした。
「それでね、私もこの旅についていくことにしたから。」

「え・・・？」

「道案内も必要はずよ。それに、私この世界ではかなり上位の魔
法使いなんだから。自分の身は自分で守れるわ。」

「・・・危険ですよ・・・？」

「だからこそよ。この国では、魔物の討伐でも王族が先頭で戦うわ。
危ないからって自分たちだけ安全なところに引きこもってるんじゃ、
国民は付いてこないもの。今回だって同じよ。あなただけに任せて
いたら、私の気がすまないの。」

(ここまでの覚悟を持っているのか・・・)

「・・・わかりました。ですが、失礼ながらあなたの力を見せても
らいたい。いいですか？」

「わかってるわ。あなたの命にも関わることだもの。もし足手まと
いになると思ったら置いて行ってくれて構わないわ。」

アンナの瞳には少しも揺らぎがない。

(自分の力に絶対の自信を持っている。そして、もし俺の希望に沿
わないレベルの力だとしても納得できる意志の強さを持っているな)
「わかりました。それでは、テストをしましょう。」

アンナのテストとオレンのスライム対策をかねて、2人は『リン
国』を出て直ぐの草原に出ていた。

「この草原には既に数匹のスライムが確認されているわ。今は『リン
』を守る結界魔術のおかげで入ってこれないけど、1年もしたら

結界の効力が切れる。それまでに『スライムコア』を壊せなければお仕舞いよ。」

「ここなら、仮にスライムを倒せなくても逃げ切れます。安心して修行できますね。」

「あら、あまり弱気にはならないでほしいわ。あなたは希望なのだから。」

「いえ、過剰な自信は破滅を呼びます。戦闘では、常に最悪の事態を想定しなければなりません。勿論、他の人たちの前では勇者らしく振舞いますが、これから一緒に旅をする人の前で強がっても仕方ないでしょ？」

「ふふ。それもそうね。」

少し緊張した様子のアナだったが、かなり緊張が解れてきたようだ。

「それで、今のうちに聞いておきたいんですが、そのスライムに弱点はないのですか？」

オレンが尋ねると、アナは苦い顔をして

「今のところ発見されてないわね。魔王も言わなかったし。」

「なるほど、それじゃ色々試してみますか。」

そう言つとオレンは持つてきていた『異次元バック』から黒いロングコートを取り出して着た。

そして、また手をつ込むと、今度は聖剣>アルクシードくを取り出し、腰の辺りに装備する。

「すごいわね。本当に出てきたわ。」

事前にバックのことは話していたのだが、やはり驚いている。

「それはなんなの？」

「これは、私の鎧ですよ。それと、聖剣>アルクシードくです。」

「これが鎧なの！？布じゃない！」

「ええ、軽くて動きやすい上に防御力は折り紙つきです。どちらも勇者装備開発会社>ワンダくの最高級品ですよ。」

他の世界に勇者を派遣する>エイジくでは、勇者に装備を売って

いる会社も存在する。

召喚された世界で必ず最高の武器や防具が手に入るとは限らないからだ。

勇者には聖剣などがつき物だが、それすら手に入らない可能性すらあるのである。

さらに、他の世界の情報が多く手に入るために、ある程度の技術力があれば様々な能力を持つ道具を製作出来るので、召喚された世界の道具を使うよりも便利な場合が多いのである。

その内の1つ>ワンダくは、独創的な発想で癖は強いが強力な装備を多く製作する、玄人好みの会社だ。

オレンの装備はほとんどこの会社のものである。

そこまでをアンナに説明したところで、オレンは魔物の気配を感じとった。

「来ましたね。」

スライムである。

異様なスライムだった。

普通のスライムが10CMほどだが、倍はあるだろう。

色も通常のより濃い青のような気がする。

そして、オレンはそのスライムから威圧感を感じていた。

(これは、本当に強い)

オレンはアンナを下がらせると、腰の聖剣を抜いた。

構えをとり、オレンがタイミングを図っていると、スライムが突撃してきた。

(速い!!!)

10Mほどあった距離を、スライムが一瞬で詰めてくる。

(後ろにはアンナがいる!)

オレンは回避を諦め聖剣を構え、迎撃しようとする。

構えた聖剣へスライムが飛び込んでくる。

(な、切れない!?)

迎撃のために横にした聖剣へぶつかったスライムは、切れること

なくブヨーンとはじかれた。

(通常バージョンでも、触れただけで大抵の物を切れるのに・・・これは、想像以上だ)

オレンはスライムが体勢を立て直す前に叫んだ。

「安全装置解除、バージョン01『むらまき村正』!」

その瞬間、オレンの持つ聖剣が光を放ち、次の瞬間には全く別のものが握られていた。

長さ1.5mほどの鈍く黒光りする刀かたなである。

後ろでアンナが驚いているが、構っている余裕はない。

既にスライムが突進の体勢に入っている。

オレンは刀を、こちらも形が変わっている鞘に納め、右手を添えて前傾姿勢になった。

そして・・・

(!来た!)

スライムが突進してきた瞬間、抜き放った!

オレンは刀を鞘に納め、油断せず後ろのスライムに向き直る。

スライムは数秒ウゴウゴと蠢き、そして動かなくなった。

「う、うそ。私たちがいくら切っても倒せなかったのに、何で動かなくなるのよ・・・?」

アンナは目の前で起きたことが信じられず呆然としている。

オレンは刀を元の聖剣の形に戻し、アンナに近寄った。

「それに、なんで聖剣の形が変わったのよ!? ということ? 説明して!」

(自分たちがどんなに頑張っても倒せなかったものだ。俺がアツサリ倒せば混乱もするか)

「説明はします。ですが、一度城に戻りましょう。あなたの今の精神状態じゃ大きな怪我をする可能性があります。安全な場所に行つてからお話します。」

「そ、そうね・・・」

アンナは特に抵抗もせず、オレンと共に城へと戻っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9818w/>

派遣勇者参上です！敵は・・・スライム？

2011年10月2日03時35分発行